ニートの夢，引きこもりの夢

――ジャン・コクトーの『恐るべき子どもたち』――

東浦（とううら）弘樹

ジャン・コクトーの『恐るべき子どもたち』（*Les Enfants terribles,* 1929）は，なぜか学生に人気が高い。筆者は毎年十人前後のゼミ生をもっているが，何年かにひとりは必ずこの作品で卒業論文を書くゼミ生がいるし，年によってはふたりいることもある。

九十年近く前，ふたつの世界大戦の間に書かれたこの中編小説が，なぜ二十一世紀の日本の若者を惹きつけるのだろう。筆者は以前，アゴタ・クリストフの『悪童日記』（*Le Grand Cahier,* 1986）の分析の中で『恐るべき子どもたち』に言及し，『悪童日記』も『恐るべき子どもたち』も一見，悲惨な物語のようだが，その実，主人公たちの願望がストレートな形で実現する「幼児型の夢」の物語であると書いたことがある(1)。

突飛に思えるかもしれないが，いまでも基本的にその考えは変わらない。ただ，最近になって，それはあくまで姉のエリザベートの視点に立った場合に言えることであり，弟のポールの視点に立てば別の見方が可能だと思うようになった。

以下では，まず『恐るべき子どもたち』を大人になりたくない姉エリザベートの願望充足の物語としてとらえ，次いで弟ポールに目を向け，彼がどのような願望をもっているか，その願望は実現するのかを考えたい。

---

(1) 拙論「母は死すべし，父は死すべし――アゴタ・クリストフの『悪童日記』――」，『人文論究』第 57 号第 1 巻，関西学院大学人文学会，2007 年 5 月，p. 101.

エリザベートの願望とその充足

『恐るべき子どもたち』は実に奇妙な小説である。この作品は弟ポールの十四歳から十八歳まで，姉エリザベートの十六歳から二十歳までの四年間を描いている。その間，ポールは雪合戦で雪の玉を胸に受け失神したことを機に体を悪くして学校を退学，病床についていた母親は亡くなり，エリザベートは服飾店のモデルとして働き始め，職場で知り合った少女アガートを家に引き入れ，ポールの元同級生のジェラールも含め四人で共同生活を始める。エリザベートはアメリカ人の富豪マイケルと結婚し，エトワール広場の近くの豪華なアパートに引っ越すが，マイケルはあっけなく交通事故で死んでしまう。やがてポールはアガートに心を寄せるようになる。アガートも密かにポールを愛しているが，それを知ったエリザベートはふたりの接近を阻止して，アガートをジェラールと結婚させる。絶望したポールは毒を飲んで自殺を図る。エリザベートはピストルで我が身を撃ってポールとともに死ぬ。

この作品が写実を狙っていないのは明らかであるが，たとえそうだとしてもあまりにも不自然なことが多いのではないだろうか。いくら虚弱体質といっても，雪合戦で雪の玉を胸に受けたくらいで，それほど大きなダメージを受けるものだろうか。ジェラールが主張するように中に石が入っていたとすれば，出血することはあるかもしれないし，目に当たれば失明する危険性もあるだろうが，失神するほどではないだろう。ましてや学校をやめなければならないほどの事態に発展することは考えにくい。ポールはもともと肺を病んでおり，雪合戦での事故はそれを顕在化しただけだというならわからないではないが，にわかには納得できないものがある。

母親の死や新婚の夫の死といった重大事が非常に軽く扱われているのも不思議だ。葬儀はどうしたのか。財産相続の手続きはどうしたのか。妻エリザベート以外，マイケルに遺族はいないのか。結婚したばかりのエリザベートが全財産を相続することに異議を申し立てる者はいなかったのか。いや，そもそも母親の死やマイケルの死を誰も大して悲しんでいないようにみえるのはなぜなのか。疑問は尽きないが，そうしたことは一切書かれていないか，あるいはわず

か数行で片付けられている。そのような「俗事」は物語から意図的に排除されているのである。『恐るべき子どもたち』を読む者はその異常なまでの展開の早さに驚かされることになるが，その原因はここにある。

また，ポールとエリザベートはともかく，ジェラールとアガートまで孤児であるというのはあまりに出来過ぎのように思えるし，親のいない彼らが経済的に全く困らないというのも不思議である。勿論，最低限の説明はある。ジェラールの叔父が彼らを援助してくれるのだ。この叔父は「金は出すが口は出さない」非常に便利な存在だ。そのおかげで四人は好き勝手に暮らすことができる。だが，そんなにうまい話があるものだろうか。

『恐るべき子どもたち』はそのような「ご都合主義」に満ち満ちている。面白いのは，「ご都合主義」的要素が全て同じ方向を向いているように思えることだ。ポールとエリザベートに襲いかかる数々の「不幸」は，結局は彼らに有利に働いていると考えることが可能なのである。

いつの世も子ども――というか中学生・高校生くらいの思春期の少年少女――は親や学校の干渉を嫌うものである。ポールやエリザベートも同じであろう。しかし，ポールは中学に行かねばならないし，エリザベートは家で母親の看病や家事をしなければならない。ところが，雪合戦での事故によってポールは学校に行かずにすむようになり，母親の死によってエリザベートは看病と家事から解放される。彼らは経済的にも全く困ることはなく，生活費を稼ぐためにあくせく働く必要はない。それどころかマイケルの死によって莫大な遺産と豪華なアパートが自分たちのものになる。

当時はまだ，ニートや引きこもりという言葉はなかったはずだが，『恐るべき子どもたち』は学校へ行ったり社会に出て働いたりせず，誰からも干渉されずに好きなように生きたいというニートや引きこもりの願望が偶然の配剤によって，あるいは魔法の棒の一振りによって，いともやすやすと実現される物語なのである。

エリザベート，ポール，ジェラール，アガートの四人はその願望を共有しているが，その中心にいるのはやはりエリザベートだというべきであろう。エリ

ザベートの夢は永遠に子どもであり続けることだ。彼女は大人になりたくない子ども，大人になるのを拒否する子どもなのである。

大人になるというのは，自らの選択と責任で生きるということだ。何が大人の条件かについて意見は様々だろうが，その指標となるのは恋愛，結婚と就職だと言えるだろう。皮肉なことに四人の子どもたちのうちで最初に就職と結婚に踏み切るのはエリザベートである。彼女は誰に強制されたわけでもなく，自分から進んで服飾店のモデルとして働き，マイケルと結婚する。しかし，どちらも長続きはしない。彼女はすぐに仕事を辞めてしまうし，夫マイケルはすぐに交通事故で死んでしまうからだ。エリザベートはアガートを仲間に引き入れるために就職し，豪華なアパートを手に入れるために結婚したようなものである。

ふつうに考えれば語られてしかるべき職場の話や，マイケルとの出会いや恋の話や，結婚式の話がほとんど出てこないのはおそらくそのためであろう。彼女にとって大切なのは「就職した」，「結婚した」という事実だけであり，その中身や過程はどうでもいいのだ。まるで犯罪者がアリバイを作るかのように，エリザベートは大人になる「ふり」，「演技」をしてみただけで，根本においては大人になることを拒否しているのだ。とりあえず大人になった「ふり」さえしておけば，ずっと子どものままでいられるというわけだ。

エリザベートにとって，永遠に子どもであり続けるということは，弟ポールと一緒にいつまでも子ども部屋で暮らすということでもある。彼女にとって子ども部屋は「繭」のようなものであり，そこにいる限りは大人になることなく特権的な子ども時代を生きることができるのだ。だから彼女は子ども部屋に執着し，口では自分だけの部屋を持ちたいと言いながら，母親が死んで部屋がひとつ空いても，ポールと一緒に子ども部屋に居続ける。勿論，理由はある。彼女もポールも母親がいた部屋に寝泊まりするのが怖いのだ。しかし，それは「弟の看病をしなければならない」というのと同じく，子ども部屋から出ないための「口実」にすぎないのではないか。

ジェラールと三人で海辺に旅に出るとき，エリザベートとポールはホテルへ

行けばそれぞれ個室に泊まれると期待する。しかし，あいにくホテルは満員で，空いている部屋はひとつしかない。テキストには「到着すると，失望が子どもたちを待っていた」(2)と書かれているが，エリザベートは本当に失望したのだろうか。むしろ安堵したのではないだろうか。結局，三人は同じ部屋に入り，ジェラールが浴室で寝ることを受け入れたので，エリザベートとポールは同じ寝室で眠ることになる。こうしてエリザベートは弟と引き離されずにすむわけだが，絶妙のタイミングで観光客がどっと押し寄せるというのは，果たして偶然だろうか。ここでもまた，弟と同じ部屋にいたいというエリザベートの願望が魔法の棒の一振りによって実現したと言うべきではないだろうか。

アガートを一緒に住まわせると決めた際も，三人の性別を考えれば，エリザベートとアガートが同じ部屋に入り，ポールにもう一つの部屋を与えるのがふつうだろうと思われるのに，エリザベートは母親がいた部屋を彼女に提供する。ここでもエリザベートは死んだ母親の部屋で寝起きするのは怖いという理由を持ち出している。アガートは母親のことを知らないから大丈夫だというわけだが，本当にそう思っているのだろうか。むしろ，ポールと同じ部屋にいたいから，そういうことを言っているだけではないのか。

エリザベートの願望が最大の危機にさらされるのは，彼女が結婚してエトワール広場の新居に移る際である。エリザベートに言われたからか，それとも義理の弟に親切にしようと思うからか，マイケルはポールも新居に住むように何度も言うのだが，ポールは固辞するのだ。しかし，ここでもまた障害はいともたやすく排除される。

結婚式の直後，マイケルは建築中の家を監督するため，新婚の妻を残してひとりで最新式の自動車に乗り南仏のエーズに向かう。

> 戻れば結婚生活が始まるだろう。
>
> しかし，部屋の精霊が監視していた。

---

(2) Jean Cocteau, *Les Enfants terribles,* Bernard Grasset, 2016, p.47. この作品からの引用は拙訳による。以下，同じ。

こんなことを書く必要があるだろうか，カンヌとニースの間の路上でマイケルは死んだ。(3)

マイケルの死は無論，不幸な事故死である。首に巻いていたマフラーが自らの運転するオープンカーのタイヤに巻き込まれたのだ。だが，そこには「部屋の精霊」の意志が働いている。「こんなことを書く必要があるだろうか」という一文は，「部屋の精霊」の「監視」とマイケルの死の間に密接な関係があることを示している。「部屋の精霊」が「監視」している以上，マイケルが死ぬことは，当然であると同時に必然だったのである。

とはいえ勿論，「部屋の精霊」が実体として存在するわけではない。それはいつまでもポールと一緒にいたいというエリザベートの願望が具現化されたものだと考えるべきだろう。その証拠に，事故後，エリザベートは一人暮らしにうんざりしていたポールを新居に引き入れ，あろうことかマイケルが寝起きするはずだった寝室を与える。彼女が一緒に暮らしたかったのは，マイケルではなくポールだったのだ。いつまでもポールと一緒にいたいという彼女の願望の奥には近親相姦的欲望が読み取れる。

しかし，ポールは彼女の思うままにはならない。彼は姉に与えられた部屋を出て，アパートのギャラリーをついたてで仕切って，自分だけの「子ども部屋」を作る。さらに彼はアガートに恋をする。エリザベートからすれば，これは明らかな「裏切り」であり，彼女がポールとアガートの仲を引き裂こうとするのは当然である。

エリザベートの計画では，ポールはアガートのことを潔く諦め，彼女のもとに戻ってくるはずだった。しかし，ここでもポールは彼女の期待を裏切る。失恋の苦しみに耐えかねたポールは毒を飲んで自殺を図るのである。

そこでエリザベートの最後にして最大の願望が明らかになる。愛する者とともに死にたいという願望である。実際，ポールとエリザベートの死は擬似的な

(3) *Ibid.,* p.83.

心中を思わせる。

> ふたりは並んで上っていく。エリザベートは獲物をさらっていく。古代ギリシャの役者が履く厚底靴を履いて，アトレイデスの地獄を去っていく。［……］あと数秒がんばれば，ふたりは肉体が溶け，魂がひとつになり，近親相姦なぞもはや存在しないところに行き着くだろう。(4)

筆が滑ったのだろうか，それともギリシャ神話に登場するアトレウスの子孫たち，具体的にはミュケナイの王でトロイ戦争の際，ギリシャ側の大将となり，帰国後，妻のクリュタイムネストラとその愛人であるアイギストスに殺害されるアガメムノンや，アガメムノンの兄弟であり，トロイ戦争の発端となった美女ヘレネの夫であるスパルタ王メネラオスたちを指す「アトレイデス」という言葉からの連想だろうか，ここではそれまで一度も使われることのなかった「近親相姦」（inceste）という単語が使われている。

さらに言えば，「魂がひとつになる」と訳した部分は，原文では «les âmes s'épousent » であり，「（互いに）結婚する」という意味の動詞 s'épouser が使われていることにも注目すべきだろう。ふたりの自殺は，少なくともエリザベートの側から言えば，婚礼の儀式にほかならないのである。

だとすれば，ふたりの死に性的恍惚のイメージが見られることになんの驚くことがあろう。

> エリザベートは恋する女がパートナーの快楽を待つために自らの快楽を遅らせるように，引き金に指をかけたまま，弟の死の痙攣を待ち，自分と合流するよう彼に叫び，彼の名を呼び，ふたりが死の中で互いのものとなる素晴らしい瞬間を窺っていた。(5)

---

(4) *Ibid.,* p.122.
(5) *Ibid.,* p.123.

この一節が持つ性的なニュアンスは明らかだろう。エリザベートはポールと同時に死にたいと願っているのだが，別の次元では，彼女はポールと性的な交渉の最中であり，恋人であるポールを促し，タイミングを合わせて，ふたり同時に性的な絶頂を迎えたいと願っていることになるのである。

それまでポールに女性との肉体的関係があったかどうかはわからない。あとで取り上げるように十五歳の頃「気持ちいい女性たちによくついて行った」(6)というところから考えれば，街娼を相手にそういう経験があるのかもしれない。一方，エリザベートは，新婚初夜を迎える前にマイケルが死んでしまったので，おそらく処女なのだろう。しかし，いずれにせよ，エリザベートにとっては，ポールとともに死ぬことこそが，真の初夜の儀であり，結婚の成就だと言えるだろう。エリザベートの近親相姦的願望は，愛する弟と一緒に死ぬことでのみ叶うのである。

泣き叫ぶアガートを地上に残して，エリザベートとポールは部屋とともに天に上っていく。エリザベートはもう何の憂いも不安もタブーもなくポールを愛し，ポールと一緒に永遠に子どものままでいられるだろう。その意味では，『恐るべき子どもたち』はエリザベートの夢が百パーセント実現するハッピーエンドの物語というべきであろう。

以上みてきたように，エリザベートの中には，永遠に子どものままでいたいという願望，愛する弟といつまでも一緒にいたいという願望，愛する弟と一緒に死にたいという願望が認められる。ある意味では特殊であり，またある意味では衝撃的な願望であるが，明確に意識はしないまでも，そのような願望を持つ人間は決して少なくないように思える。『恐るべき子どもたち』は簡単には口にすることのできない，そして現実には叶うはずのないそうした願望がいともやすやすと実現する小説である。だからこそ，この作品は同じような願望をもつ若い読者を惹きつけてやまないのだろう。

---

(6) *Ibid.,* pp.54-55.

ポールの願望とその挫折

以上のことは姉エリザベートを中心に考えられることである。しかし，弟ポールを中心に考えれば別の見方も可能であろう。

ポールは学校にも仕事にも行かず，誰からも干渉されず，子ども部屋の中で好き勝手に生きたいという願望を少なくとも途中まではエリザベートと共有している。だが，恋愛に関しては事情が異なる。彼は姉エリザベートに対して近親相姦的な愛情はもっていない。彼の恋愛感情は，最初は同級生のダルジュロスに，ついでダルジュロスによく似たアガートに向けられている。

「十五歳のときに十九歳に見えた」(7)ポールはまた始終外出し，街で見かけた女性――おそらくは街娼であろう――について行く。彼がそういう女性と肉体的な関係を持ったのかどうかは定かでない。だが，そういう出会いを率直かつ無邪気に語るポールに，エリザベートはあれこれ質問し，からかいながらも嫌悪を覚え，新聞を取り丹念に読むふりをして体裁を繕う。彼女の反応は姉のそれというよりも，夫の浮気を心配する妻の反応のようだが，当然ながらポールがそれを気にする様子はない。

ポールの愛の対象がダルジュロスからアガートへ移行することに彼の性的成熟を見るべきだろうか。一般に子どもの性愛は，成長するにつれて，自己愛から同性愛へ，同性愛から異性愛へと変化するものである。当初ポールを愛していたが，やがてエリザベートを愛するようになり，最終的にアガートと結婚するジェラールのケースは，まさにそれに当てはまるだろう(8)。では，ポールの場合はどうだろうか。

十四歳のポールは「学校の雄鶏」たるダルジュロスに対して「愛を知る前の

---

(7)　*Ibid.,* p.54.

(8)　同性愛から異性愛への移行はアガートにもみられる。「ジェラールをポールからエリザベートへと導いたメカニズムが，アガートをエリザベートからポールへと導いた。」（*Ibid.,* p.69.）とあるからだ。ただし，ジェラールの場合もアガートの場合も，それは自然発生的な移行というより，意図的な移行と言うべきだろう。彼らは同性を愛することがタブーであると知っており，意識的に異性を愛するようにしているのだ。

愛」,「性も目的もない純潔な欲望」を抱いている(9)。しかし，ダルジュロスは雪合戦の事故の後，校長に胡椒を投げつけ放校になり行方がわからなくなる。二重の意味――ダルジュロスと会えないという物理的な意味と同性を愛するのはタブーであるという倫理的な意味――でダルジュロスと隔てられたポールは，アタリーに扮したダルジュロスと瓜ふたつのアガートを愛するようになる。いわばダルジュロスの代理としてアガートを愛するのである。

いくら舞台用に女装しているとはいえ，男性的なイメージをもつ不良少年のダルジュロスが女性のアガートとそっくりであるというのは不思議に思えないではないが，ここまではジェラールのケースとほぼ同じである。また，ダルジュロスの代理としてアガートを愛するというのは，一見ショッキングに思えるが，そのこと自体は不自然なことでも不道徳なことでもない。現実の世界でも，初恋の人と似た異性を恋人にすることは決して珍しいことではないからだ。

小説の中に「もしも」を持ち込むのはナンセンスだが，もしポールがアガートと結ばれていたら，ジェラールとアガートがそうであるように，それなりに幸せな，しかしどうしようもなく平凡なカップルになっていただろう。しかし，ダルジュロスは――あるいはポールの中にあるダルジュロスの幻影は――そう簡単にポールを手放しはしない。第十五章，終わりから二つ目の章で，ジェラールはダルジュロスと偶然再会したと言って，ダルジュロスから託された毒の黒い球をポールに渡すのである。

ジェラールの話によれば，ダルジュロスはある自動車メーカーのセールスマンをしており，インドシナとフランスを行ったり来たりしているとのことだが，このことはどうとらえるべきだろうか。ジェラールがアガートと結婚し，叔父の工場を継いで，つまらない大人になったのと同じように，ダルジュロス

---

(9) *Ibid.*, p.11.「雄鶏」(coq) がどのような性的ニュアンスを持つかは明らかだろう。だとすれば,「性も目的もない」,「純潔な」という形容はいささか怪しいと言わざるをえない。この一節を書くコクトーの中には，ある種の「検閲」が働いていたと考えることも不可能ではないだろう。

もまた現実に飲み込まれ，つまらない大人になってしまったということだろうか。たしかにジェラールが工場の経営者であるという情報をいち早くキャッチし，一度工場に行きたいと言うところなぞは，ビジネスマンとなったダルジュロスの大人の打算が透けて見える。

しかし，ポールにとっては，ダルジュロスは昔と少しも変わらない。いや，それどころかダルジュロスは彼のことを覚えており，「雪玉」というあだ名で呼んでいる。あだ名で呼んだのは，ポールをバカにしているからかもしれないし，ポールの名前を覚えていないからかもしれない。しかし，ポールの心は喜びに打ち震えたのではないか。ダルジュロスは中学生の頃ポールが毒に興味を持っていたことを覚えていて，わざわざ黒い毒の玉をプレゼントしてくれた――ポールは再びダルジュロスに支配され，ダルジュロスからもらった毒を飲んで自殺することになる。『恐るべき子どもたち』が雪の白い玉で始まり，毒の黒い玉で終わると言われる所以である。ポールにとってダルジュロスは「死の天使」にほかならないのだ。

よく知られていることだが，ダルジュロスにはモデルがいる。コクトーがリセ・コンドルセに通っていたとき，同じ学校に通っていたピエール・ダルジュロスである。コクトーは『恐るべき子どもたち』以外に，『白書』（*Le Livre blanc,* 1928），『記念写真』（*Portraits-Souvenir,* 1938），『ポトマックの最後』（*La Fin du Potomak,* 1940）[10]，さらには映画『詩人の血』（*Le Sang d'un poète,* 1930）でもダルジュロスに言及し，その美しさやカリスマ性，さらには彼自身がダルジュロスに寄せていた名状しがたい愛情について語っている。

勿論，『恐るべき子どもたち』のダルジュロスがどの程度，現実のダルジュロスをなぞっているかはわからない。むしろ，現実は単なる材料にすぎず，コクトーはそれを内在化しこね回しダルジュロスという神話的人物を作り上げたと考えるのが自然であろう。ただ，ダルジュロスが雪の玉を投げ，それを胸に受けた少年が血を流して倒れるというのは現実にあったことのようだ。勿論，

---

(10) ただし，「生徒ダルジュロス」と題された章は『ポトマックの最後』の初版にみられるのみで，それ以降の版では削除されている。

少年は少し鼻血を出しただけで大きな怪我はしておらず，『恐るべき子どもたち』のポールのように学校に行けなくなるようなことはなく，ダルジュロスが放校処分になることもなかった。しかし，コクトーは中学時代に目撃したこの場面に大きな衝撃を受け，多くの作品でそれを再現することになる。

コクトーはなぜそれほどこの場面にこだわるのだろう。一般に人が同じ場面を何度も再現するのは，それが極度に快いか，あるいは逆に極度に不快であるか，あるいはその両方だからである。コクトーの場合はどうなのだろう。

その点で特に興味深いのは，コクトーが監督・脚本に加えナレーションもつとめた映画『詩人の血』である。この映画は「傷を負った手，または詩人の傷跡」，「壁に耳はあるか」，「雪合戦」，「聖体の冒涜」という四つのエピソードから成り立っているが，第三エピソード「雪合戦」の中で，ひとりの少年がダルジュロスの投げた雪の玉を胸に受け，鼻血を出してその場に倒れる。雪合戦をしていた子どもたちやダルジュロスが少年のそばに歩み寄るがすぐに立ち去り，映画はそのまま第四エピソード「聖体の冒涜」に入る。

少年はダルジュロスのことを考えながら，今度は口から血を流し，目をつぶる。すると，少年のすぐそばにテーブルとそのテーブルの両端に座ってトランプをしている一組の男女と立ったままそれを眺めているルイ十五世風の服を着た男が出現する。女は男に「もしハートのエースを持っていないなら，あなたの負けよ」と言う。男は足元に倒れている少年の左胸に手を入れて，そこからハートのエースを取り出し，自分の手札に加える。やがて建物の中から黒人の守護天使が現れ，少年のそばに寄り，少年が着ていたマントを少年の体にかけ，その上に覆いかぶさる。守護天使は少年を吸収し，少年はいなくなる。守護天使は引き上げようとするが思い直し，男のそばに戻り，手札からハートのエースをこっそり抜き取る。男は内ポケットから拳銃を取り出し，こめかみを撃って自殺する。

ここでこの映画を細かく分析する余裕はないが，確かなこととして言えそうなのは，雪の玉を胸に受けた少年が死ぬこと，そして守護天使の登場からもわかるように，その死は決して悲惨なものではなく，むしろ「甘美な死」だとい

うことだ。もしそれがコクトーの中にある強迫的な，そして強迫的であるがゆえに反復されるイメージだとすれば，コクトーはこの少年になりかわり，ダルジュロスの投げた雪の玉に当たって死にたかったのではないかと推測することができるだろう。

作者と作中人物を安易に同一視してはならないが，『恐るべき子どもたち』のポールはコクトーのこのような夢を受け継いでいるのではないか。姉のエリザベートが愛する者とともに死にたいと願っているのと同じように，ポールは愛する者の手にかかって死ぬことを夢みているのではないだろうか。

だとすれば，雪合戦で受けた怪我から回復したポールは，幸運にも助かったのではなく，不運にも生き延びたことになる。彼は雪合戦のときに死ぬべきだったのであり，その後，彼が生きた四年間は単なる付け足しにすぎないのだ。彼がダルジュロスからもらった毒の黒い球で自殺を図るのは，いわば仕切り直しであり，あのとき実現しそこねた「甘美な死」をやり直すことにほかならない。

ポールが死ぬ間際に窓越しに「雪合戦で赤くなった鼻や頬や手」を，見覚えのある「顔やマントやウールのマフラー」(11)を見るのはそのせいだろう。コクトーが作品の中で雪合戦の場面を何度も再現しているように，ポールは自分の「人生」の中でその場面を再現しようとしているのである。

ポールは少年たちの中にダルジュロスを探す。しかし，ダルジュロスはどこにもいない。ポールに見えるのはただ雪の玉を投げようとするダルジュロスの「動き」，「巨大な動き」だけである(12)。『不思議の国のアリス』のチェシャ猫のように，本人はいないのに動きだけが見えるというわけだ。「甘美な死」をやり直そうというポールの試みは，最後の最後で失敗したと言わざるをえない。

彼は四年の間に現実に染まり汚れてしまったのだ。玉の色の変化はそのこと

---

(11) *Ibid.,* pp.123-124.

(12) «Il cherchait Dargelos. Lui seul il ne l'apercevait pas. Il ne voyait que son geste, son geste immense. », *Ibid.,* p.124.

を示している。かつては無垢を思わせる白だったものが，いまでは黒になっている。雪合戦のあの瞬間，愛しいダルジュロスのそばで「甘美な死」にかぎりなく近づいたあの瞬間は，もう二度と戻ってくることはないのである。

ポールの視点に立てば，『恐るべき子どもたち』は，愛する者の手にかかって死ぬという「甘美な死」を実現しそこねた少年が，再度それを実現しようとして失敗する物語である。ポールは一度はダルジュロスへの愛を諦め，現実と折れあってアガートを愛そうとする。女性であるアガートならば，タブーを犯すことなく愛せるからである。しかし，この愛は姉エリザベートによって妨害される。エリザベートは勿論，愛する弟を独占するためにふたりの恋の邪魔をするのだが，ポールからすれば，この恋が成就しないのは，ある意味，必然だったのではないだろうか。ポールの中にはダルジュロスへの愛を貫きたいという願望があり，その願望がエリザベートに乗り移り，彼女にふたりの恋の邪魔をさせた，つまりエリザベートの妨害がなくてもポールはアガートと結ばれることはなく，ダルジュロスへの愛を貫くために彼からもらった毒薬を飲んでいたと考えることも決して不可能ではないのである。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

以上みてきたように，『恐るべき子どもたち』は姉エリザベートの視点と弟ポールの視点，二つの視点から異なる読み方ができる作品である。エリザベートの視点から考えると，それは子どものままでいたいという夢，愛する弟といつまでも一緒にいたいという夢，愛する弟とともに死にたいという夢がストレートに実現する物語である。一方，ポールの視点から考えると，愛する者の手にかかって死にたいという夢をすんでのところで取り逃がした少年が再度夢を実現しようと試み失敗する物語である。この作品は，近親相姦と同性愛という禁じられた愛の夢を描き，夢を実現しても，あるいは実現しようとして失敗しても，最終的に待ち受けているのは死であるという非常に悲痛な，しかしそれだけに醒めたメッセージを読む者に送ってくる。

大人は若者に安易に「夢を持て」と言いたがる。しかし，夢というものは本来，倫理的な制約を超越した恐ろしいものであり，人を破滅させるものなのだ。子どもたち，若者たちは無意識のうちにそのことを知っている。だからこそ，彼らは『恐るべき子どもたち』に惹きつけられるのであろう。そう考えるならば，「恐るべき子どもたち」とは，恐るべき夢に取り憑かれてしまった子どもたち，夢に生き，そして夢に生きたがゆえに死んでしまう子どもたちと理解すべきなのかもしれない。

――文学部教授――